

特集 不安を超える② まじない・日の良し悪し

深く因果の道理をわきまえて現世祈禱やまじないをおこなわず占いなどの迷信にたよらない

南徹 (法務員)



今から六年前、初めてのお参りの時の事です。私の実家は、在家でお寺ではありません。得度を受けてはいま

思いますか。手のひらに人という字を書いて三度飲み込みました。人前であがらないおまじないです。そうです、私は極限の状態に追い込まれて、現世祈禱、まじないにたよってしまったのです。僧籍を持つものが行う行為ではありませんね。

「先負」など、勝負事で用いられていたものが、日本に来て今のように変化したので、仏滅も「物滅」と書き「全てがむなし日」という意味で全くの別物でした。

たが、人前でお経を勤めるのは初めてでした。忘れました、お寺に勤めて二日目、月参りに行く事になりました。車でお参りの家の前までは無事に行けたのですが、いざ車から降りようとすると、足が震えて降ることができな感じです。手は震え、心臓はバクンバクンと。私は、何をしたらと

よく悲しみ事があると、近所の人とか親戚だとかが色々知恵を入れてくれます。四月十九日は三月にかかつてはいけないとか、友引の日に葬式をするといけないとか。そういう事を鵜呑みにして、慌てて連絡してこられるのですね。このことは、四十九日を三ヶ月越しに行うと始終苦が身に付く(四十九が三に付く)という迷信で、ただの語呂合わせ、何の根拠もないこと

「浄土真宗の教章」の「宗風」に「深く因果の道理をわきまえて、現世祈禱やまじないを行わず、占いなどの迷信にたよらない。」とあります。正しく因果の道理をわきまえれば、不幸が続く先祖の祟りと思われることも、すべてが

自分の撒いた種が結果として現れているにすぎないと。私たちは良い種を撒こうと思いつきながら悪い種ばかりを撒いている自分に気づかせていた

「あしたに礼拝、夕べに感謝」阿弥陀如来の真実の教えに従い、南無阿弥陀仏のお名号を心の支えとし、慚愧と感謝のうちに日暮しをさせてください、念仏にかおる家庭を築き、私たちの心の宝物であります、南無阿彌陀仏の念仏を子や孫、そしてひ孫へと相続していくことが何よりも大切ではないでしょうか。

因果の二種に分けられるように思います。前者は因果関係が客観的に事実として証明できるものです。「肺がん患者の九〇％は喫煙者である」という場合のタバコと肺がんの因果関係は、私はそう思う、思わないに関わらず、万人が認めざるをえない事実です。

後者の主観的意味的な因果とは、客観的事実として確認できなくても、その人の「人生観」や「人生における意味」として、主観的に「そう思う」という形で位置づけられる因果関係です。「私が病気になるたのは、〇〇だからである」の「〇〇だから」というところに「四十九日を三ヶ月ししたから」「神の思召したから」とかとかが入るのです。この結果と原因の関連づけは、「そう思う」という主観的なもの(客観的事実ではない)にも関わらず、生活の場で「私が毎日タバコを本吸ったから」という客観的科学的因果と同質に交錯して語られるところに問題があるように思えます。

※論説 因果の道理

因果の道理についてちよつと突っ込んで考えてみたいと思います。調べてみると、因果の道理は、基本的に客観的科学的な因果と主観的意味的な

責任

また、人生のさまざまな出来事に